

財務分析資料

対象会計：一般会計等

※各年度の人口は総務省HPの住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数(1月1日)ものを使用しております。

[URL\(https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei02_02000220.html\)](https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei02_02000220.html)

1. 資産の状況

本節では、資産残高に着目し、将来世代に残る資産、自治体の規模（財政や人口など）に対する資産の多寡を分析します。

基金のような資産は多いほど余裕があると言えますが、有形固定資産は将来のコストを発生させる要因となりますので、適正なレベルで維持することが重要であると考えられます。

また、資産が形成されてからの時間の経過度合いを示す老朽化比率についても分析します。

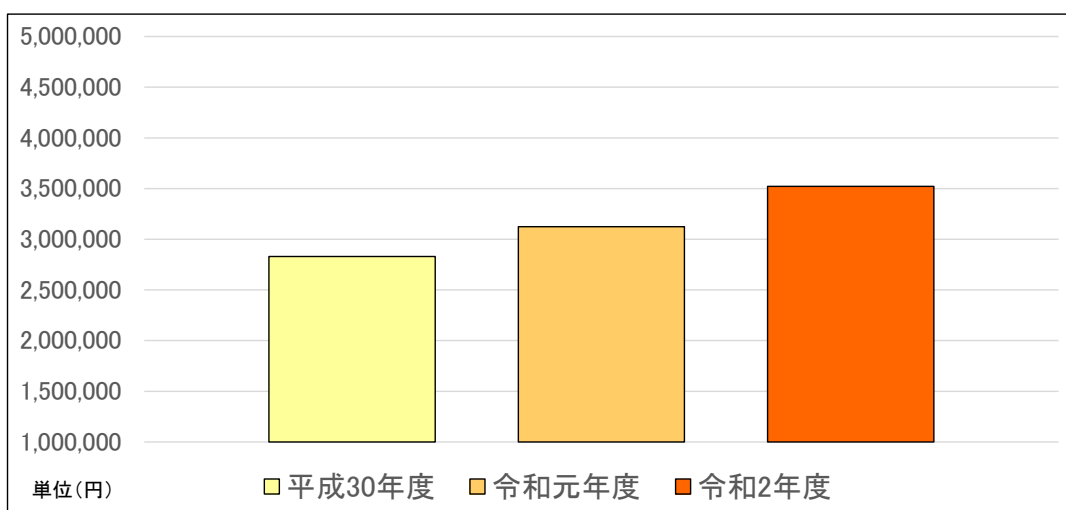
1-1 住民一人当たり資産額(千円)

財務書類（貸借対照表）を作成することにより得られる、地方公共団体の保有する資産のストック情報（資産額）を住民基本台帳人口で除して、住民一人当たりの資産額を表す指標です。

資産には、住民サービスを提供するために保有し将来世代に引き継ぐ資産（有形・無形固定資産）や、将来、債務返済や行政サービスに使用することが可能な資産（投資・流動資産）等があります。住民一人当たり資産額の大きな減少は、資産圧縮に取り組んだ結果である場合と、施設等の老朽化により有形固定資産の金額が減少している場合などがあります。

$$\text{住民一人当たり資産額} = \text{資産合計} \div \text{住民基本台帳人口}$$

年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
住民一人当たり資産額(円)	2,829,456	3,124,336	3,520,752
貸借対照表 資産総額(円)	30,045,994,703	32,630,565,248	36,520,758,543
人口	10,619	10,444	10,373



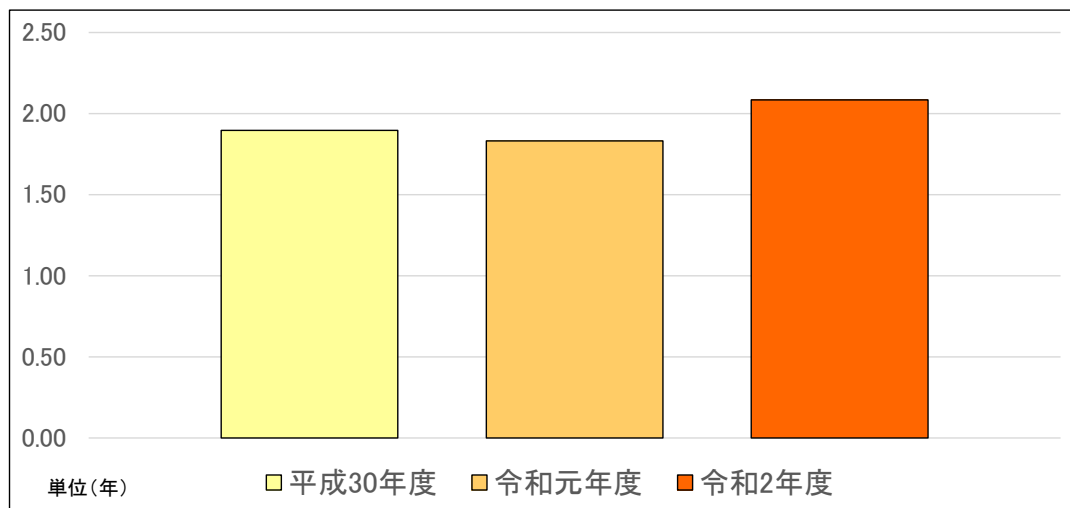
1-2 歳入額対資産比率(年)

当該年度の歳入総額に対する資産合計の比率を示す指標で、これまでに形成されたストックとしての資産が、歳入の何年分に相当するかを表す指標です。

歳入総額とは、前年度からの繰越収入を含み、財務書類(資金収支計算書)を作成することにより得られる、各収入及び前年度末資金残高の合計となります。

$$\text{歳入額対資産比率} = \text{資産合計} \div \text{歳入総額}$$

年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
歳入額対資産比率(年)	1.90	1.83	2.08
貸借対照表 資産総額(円)	30,045,994,703	32,630,565,248	36,520,758,543
歳入総額(円)	15,845,146,342	17,809,872,296	17,526,257,308



1-3 有形固定資産減価償却率(%)

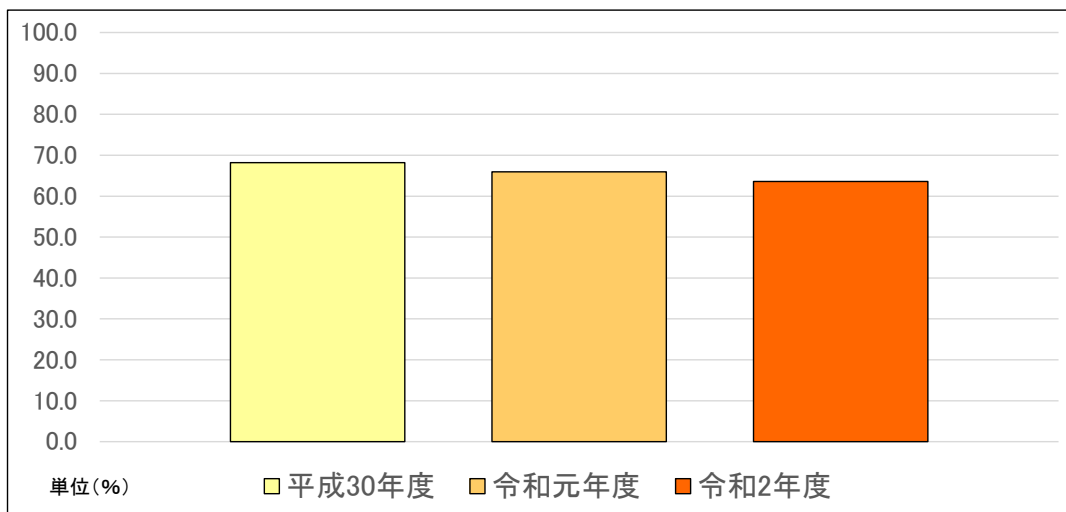
地方公共団体が保有する有形固定資産のうち、償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の比率を示す指標で資産の耐用年数に対して、資産の取得からどの程度経過しているかを表す指標です。

償却資産の耐用年数には「減価償却資産の耐用年数等に関する省令」(昭和40年大蔵省令第15号)に規定されている耐用年数を用いることを原則としています。

$$\text{有形固定資産減価償却率} = \frac{\text{減価償却累計額}}{\text{有形固定資産合計} - \text{土地等の非償却資産} + \text{減価償却累計額}}$$

年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
資産老朽化比率(全体)(%)	68.2	66.0	63.6
貸借対照表 償却対象資産の取得価額合計(円)	58,104,016,468	61,538,941,618	64,785,480,996
貸借対照表 減価償却累計額(円)	39,611,756,824	40,596,633,171	41,189,022,393

※償却資産とは、貸借対照表の「建物」、「工作物」、「船舶」、「浮標」、「航空機」、「その他」を示す。



2. 資産と負債の比率

現在保有している資産を形成するにあたって、現世代以前の負担額、将来世代の負担額を分析します。ここでいう将来世代の負担とは、貸借対照表の負債をベースとした指標で示しますが、資産の状況の項でも説明したように、公共施設の維持・更新といった負担もあります。

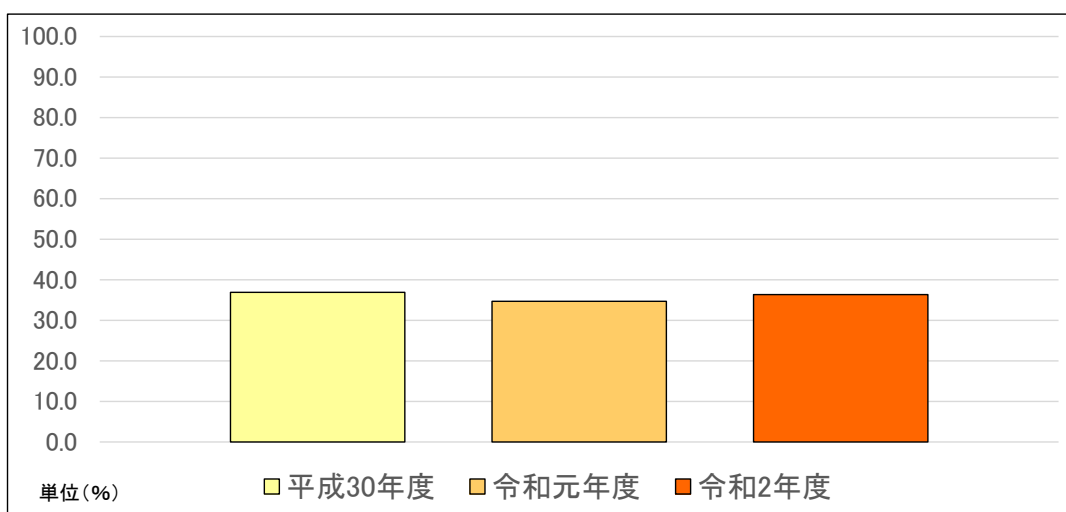
2-1 純資産比率(%)

財務書類(貸借対照表)を作成することにより得られる、資産のストック情報(資産額)に対する純資産の比率を示す指標で、保有している有形固定資産等がどの世代の負担により行われたかを表す指標です。

純資産の増加は、過去及び現世代の負担により将来世代が利用可能な資源を蓄積したことを表す一方、純資産の減少は、将来世代が利用可能な資源を過去及び現世代が消費していると捉えることができます。

$$\text{純資産比率} = \text{純資産} \div \text{資産合計}$$

年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
純資産比率(%)	36.9	34.7	36.3
貸借対照表 純資産総額(円)	11,088,421,320	11,315,210,045	13,273,497,401
貸借対照表 資産総額(円)	30,045,994,703	32,630,565,248	36,520,758,543



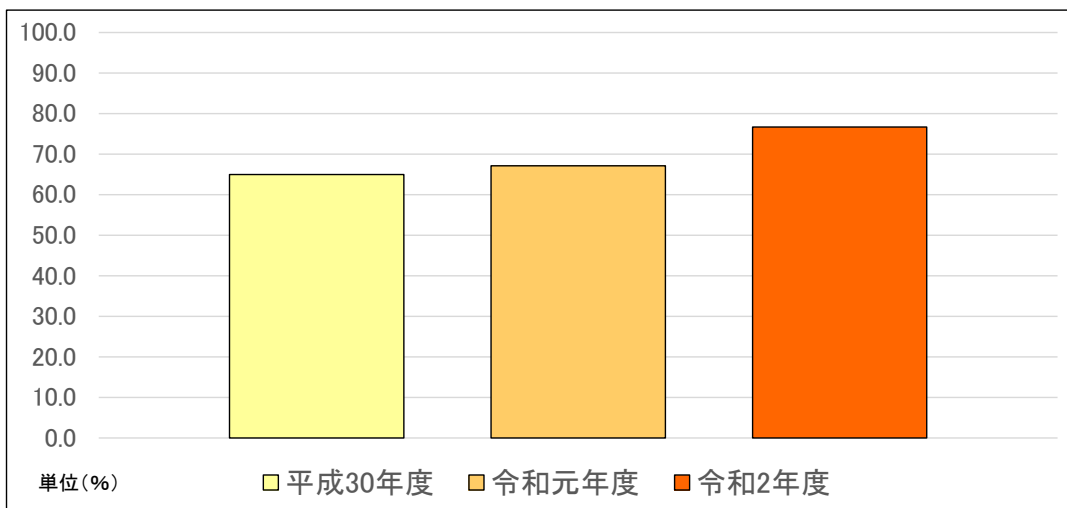
2-2 将来世代負担比率(%)

有形固定資産などの社会資本等に対して、財源のうち将来の償還等が必要な負債による調達割合（公共資産等形成充当負債の割合）を表す指標です。

$$\text{将来世代負担比率} = \text{地方債残高(※)} \div \text{有形・無形固定資産合計}$$

※地方債残高から次を控除したもの・・・臨時財政特例債、減税補填債、臨時税収補填債、臨時財政対策債、減収補填債特例分

年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
社会資本等形成の世代間負担比率 (将来世代負担比率)(%)	65.0	67.1	76.7
地方債残高(円)	16,309,623,076	18,524,911,076	19,815,919,051
翌年度償還予定地方債残高(円)	1,942,355,139	2,055,173,000	2,942,241,614
臨時財政特例債(円)	0	0	0
減税補填債(円)	16,861,000	12,909,000	0
臨時税収補填債(円)	0	0	0
臨時財政対策債(円)	3,438,193,000	3,315,672,000	0
減収補填債特例分(円)	0	0	0
貸借対照表 有形固定資産総額(円)	22,757,335,567	25,681,952,447	29,652,627,561
貸借対照表 無形固定資産総額(円)	14,495,760	25,611,864	26,070,328



3. 負債の状況

決算年度末時点での負債の程度を分析し、今後の財政が健全に推移するかどうかの判断材料とします。社会情勢や景気動向、国の方針などに左右される部分がありますが、決算年度までの傾向を知ることによって将来の負担が見えてきます。

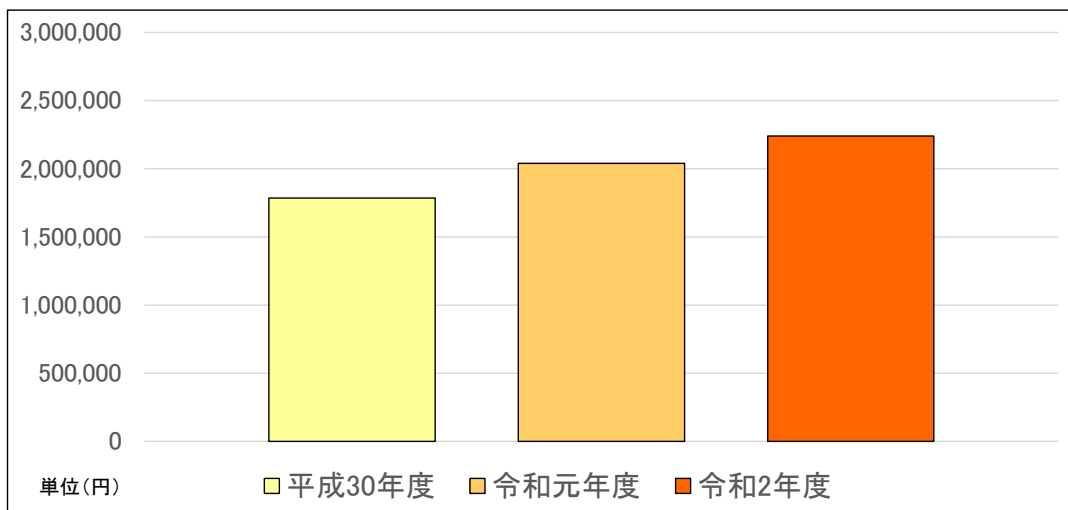
ただし、地方公共団体における負債には、交付税措置等によって国が一部負担するものや、負担の公平性の観点から発生したものがあるため、民間企業における負債とは多少異なる意味があります。

3-1 住民一人当たり負債額(円)

財務書類(貸借対照表)を作成することにより得られる、地方公共団体の保有する負債のストック情報(負債額)を住民基本台帳人口で除して、住民一人当たりの負債額を表す指標です。

$$\text{住民一人当たり負債額} = \text{負債合計} \div \text{住民基本台帳人口}$$

年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
住民一人当たり負債額(円)	1,785,250	2,040,919	2,241,132
貸借対照表 負債総額(円)	18,957,573,383	21,315,355,203	23,247,261,142
人口	10,619	10,444	10,373

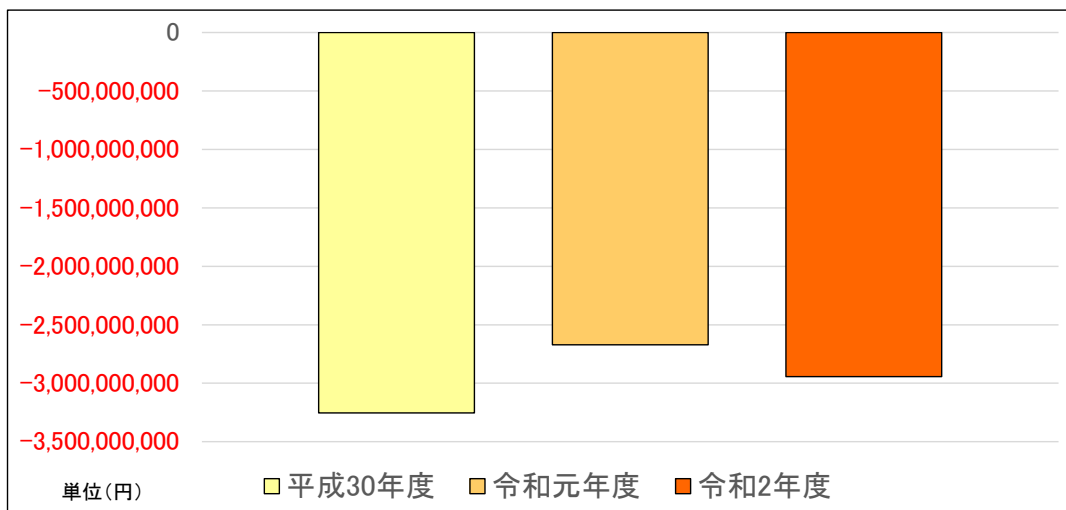


3-2 基礎的財政収支(プライマリーバランス)(円)

税収・税外収入と公債費を除く歳出の収支のことを表し、その時点で必要とされる政策的経費をその時点の税収等でどれだけまかなえているかを示す指標であり、地方公会計においては財務書類(資金収支計算書)を作成することにより得られる、業務活動収支及び投資活動収支の合算額です。プラスだと黒字、マイナスなら赤字です。

$$\begin{aligned} \text{基礎的財政収支} &= \text{業務活動収支(支払利息支出を除く)} \\ &+ \text{投資活動収支(基金積立金支出及び基金取崩収入を除く)} \end{aligned}$$

年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
基礎的財政収支 (プライマリーバランス)	-3,253,510,164	-2,671,149,615	-2,944,621,968
資金収支計算書 業務活動収支(円)	-2,370,327,511	1,187,666,471	123,099,114
資金収支計算書 支払利息支出(円)	68,103,281	63,330,932	57,358,505
資金収支計算書 投資活動収支(円)	-782,880,577	-3,752,481,007	-2,682,197,222
資金収支計算書 基金積立金支出(円)	39,014,279	678,437,138	484,073,636
資金収支計算書 基金取崩収入(円)	207,419,636	848,103,149	926,956,001



4. 行政コストの状況

行政コストの状況は「行政サービスに係るコストはどのようになっているか」といった住民等の関心に基づくものです。地方自治法においても、「地方公共団体は、その事務を処理するにあたっては住民の福祉の増進に努めるとともに、最少の経費で最大の効果を上げるようにしなければならない」とされているものであり重要な視点です。

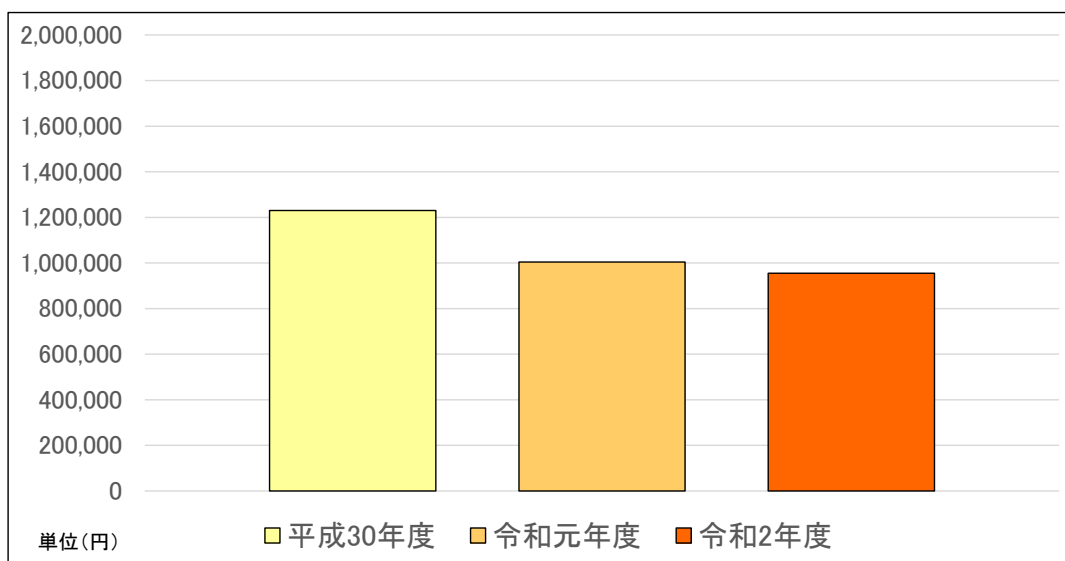
4-1 住民一人当たり行政コスト(円)

財務書類(行政コスト計算書)を作成することにより得られる、純行政コストを住民基本台帳人口で除して、住民一人当たりの行政コストを表す指標です。

純行政コストは、地方公共団体の行政活動に係る人件費や物件費等の費用を発生主義に基づきフルコストで表示したもので、行政活動の効率化に資する情報を一括して提供するものです。

$$\text{住民一人当たり行政コスト} = \text{純行政コスト} \div \text{住民基本台帳人口}$$

年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
住民一人当たり行政コスト(円)	1,229,568	1,003,728	954,552
行政コスト計算書 純行政コスト(円)	13,056,782,653	10,482,932,425	9,901,570,239
人口	10,619	10,444	10,373



4-2 一人当たり性質別行政コスト(円)・構成比(%)

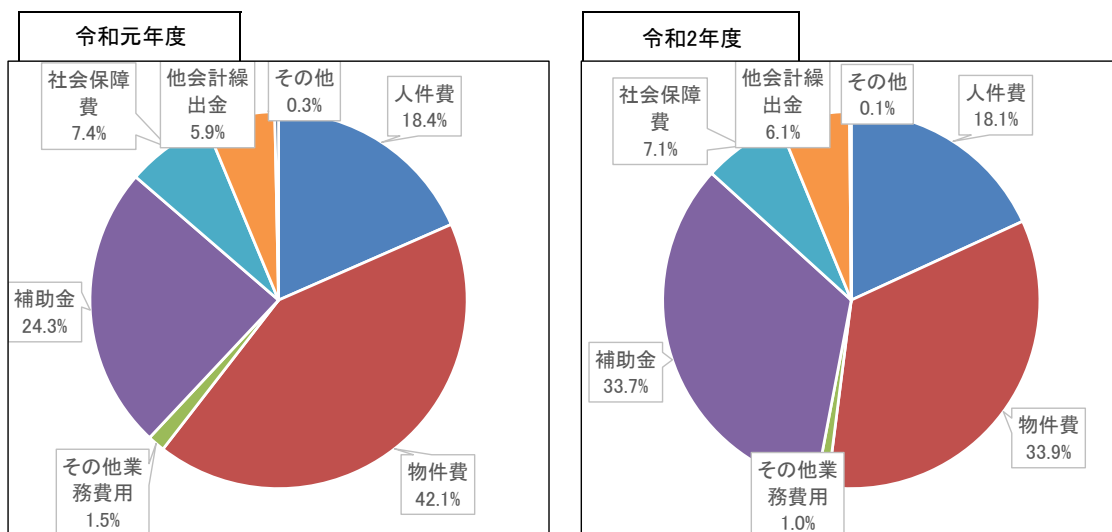
性質別行政コストを人口で除して住民一人当たりの性質別行政コストとすることにより
地方公共団体の行政活動に係る効率性を測定することが出来ます。

一人当たり性質別行政コスト＝ 各項目行政コスト ÷ 人口

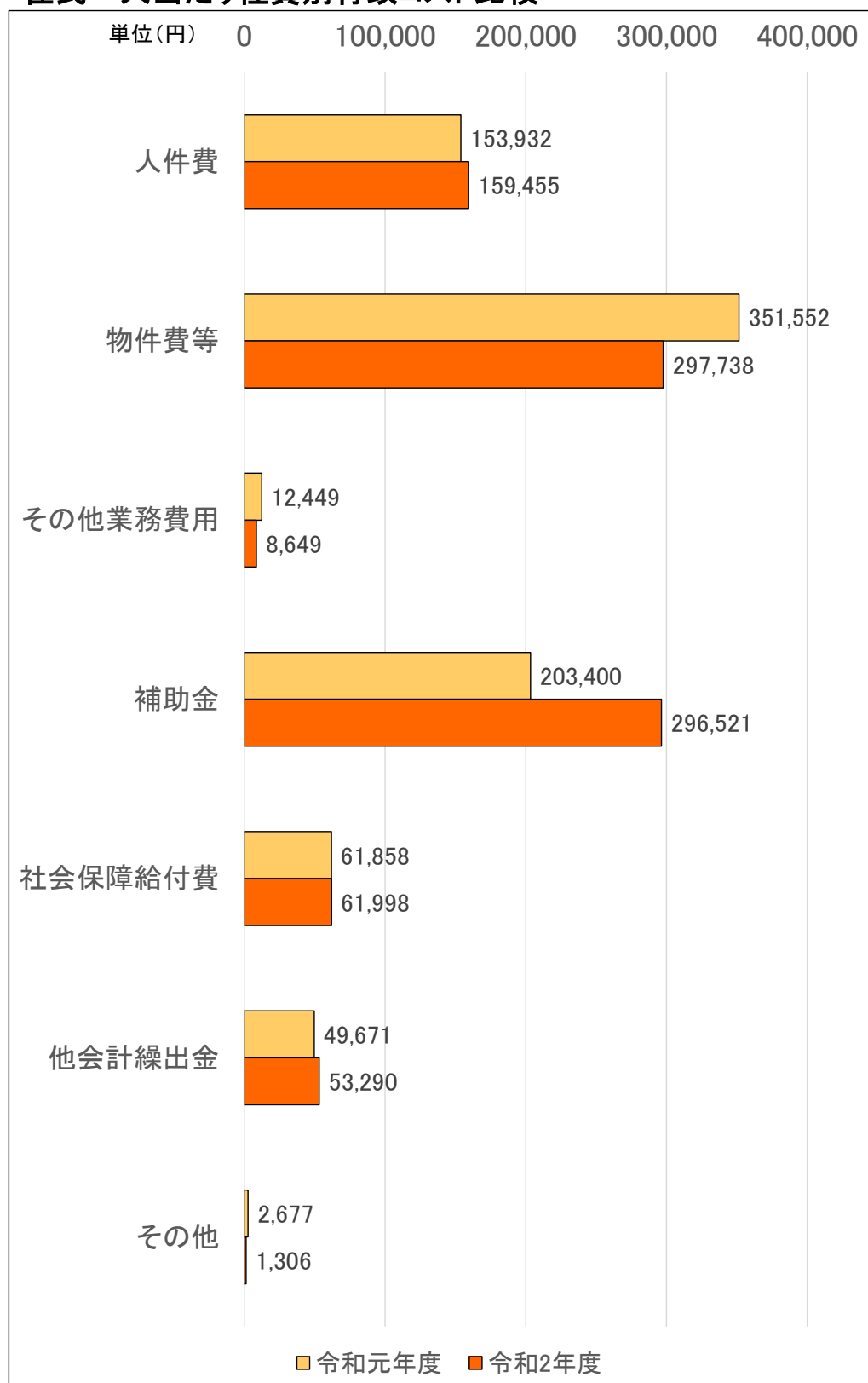
令和元年度	金額(円)	構成比(%)	令和2年度	金額(円)	構成比(%)
人件費	1,607,660,626	18.4%	人件費	1,654,029,406	18.1%
物件費	3,671,613,941	42.1%	物件費	3,088,438,340	33.9%
その他業務費用	130,012,985	1.5%	その他業務費用	89,720,823	1.0%
補助金	2,124,312,380	24.3%	補助金	3,075,815,254	33.7%
社会保障給付費	646,040,161	7.4%	社会保障給付費	643,101,020	7.1%
他会計への繰出金	518,764,586	5.9%	他会計への繰出金	552,778,398	6.1%
その他	27,953,380	0.3%	その他	13,548,193	0.1%
合計	8,726,358,059	100.0%	合計	9,117,431,434	100.0%

年度	令和元年度	年度	令和2年度
人口	10,444	人口	10,373

構成比グラフ



住民一人当たり性質別行政コスト比較



5. 受益者負担の状況

受益者負担の状況は、「歳入がどれくらい税収等で賄われているか(受益者の水準はどうなっているか)」と言った住民等の関心に基づくものです。行政コスト計算書において、使用料・手数料などの受益者負担の割合を算出することが可能であるため、これを受益者負担の適正さの判断指標として用いることが出来ます。

5-1 受益者負担比率(%)

財務書類(行政コスト計算書)を作成することにより得られる、経常収益(使用料・手数料などの行政サービスに係る受益者負担の金額)に対する経常費用(行政サービス提供に係る負担)の比率を示した指標で、行政サービスの提供に対する受益者の負担割合を表した指標です。

$$\text{受益者負担比率} = \text{経常収益} \div \text{経常費用}$$

年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
受益者負担割合(%)	3.4	2.7	4.6
行政コスト計算書 経常収益(円)	348,828,638	233,550,517	423,235,883
行政コスト計算書 経常費用(円)	10,350,642,035	8,726,358,059	9,117,431,434

